読売俳壇

矢島渚男 選

一茶忌や虚子も波郷も阿らず　越谷市　安居院半樹

【評】一茶忌に際して、一茶も虚子も波郷も時世や時の権力に追従しない俳人だったと思う。子規も龍太もそう。みな安易に妥協せず表現の世界を守った人たちだった。

七五三一番端の綿菓子屋　神奈川県　石原美枝子

【評】七五三帰りだろうか。参道にはいろいろ屋台が出ている。懐かしい綿飴屋があるか親の世代は気になる。やっと一番端っこに見つかった。

霜焼や千人針を縫ひし日も　戸田市　小暮　よし

【評】霜焼けの手で今も縫物をしている九十代の方。昔、出征する人に千人針を縫った。生きて帰ってと、あの時も霜焼けしていたっけ。

冬の河馬見ていてネンテンかと問はる　東京都　吉田かずや

報恩講悪人われも香あげて　大阪市　津田真砂子

水澄めりテトラポットに魚住めり　川崎市　久保田秀司

手袋に駄賃も入れて買い物へ　青梅市　松野　英昌

老ふたり蜜柑三つ目剝くでなし　宇都宮市　松広　訓

つつがなく一日長し秋深し　奈良県　松井　秀仁

文化祭下手の横好きレベルでも　熊谷市　間中　昭

宇多喜代子 選

真っ直ぐに歩きて遠し大花野　調布市　浅野　文男

【評】すぐそこだと歩き始めて、意外に遠いことにガックリすることがある。花野を目標に歩き続けているのだが、まだまだのようだ。

鷹の爪譲らぬ色となりにけり　姫路市　難波　佳代

【評】よく熟れた鷹の爪はつやつやした深紅。畑にあるとき、もういいか、もういいか、と待ち、深紅がますます深くなったのを見定めて挽ぐ。中七の表現が強い。

穂芒の揺れて目の丈風の丈　吉川市　人見　正

【評】目の丈ほどの芒がゆれている。風にゆれている穂芒の様子をリズミカルに言いとめたところに面白みのある句。

深秋や竹人形に竹の冷え　佐野市　高橋すみ子

町医者の臨時休業冬の雨　海老名市　岡部　福

後の月ものの影みな立たせけり　茨木市　木川　志佳

一輪車両手ひらひら秋の風　東大阪市　土屋　鉄男

大根を背中に背負う母の夢　千葉市　椿　良松

金木犀抱く赤子の大欠伸　東京都　斎木百合子

綿虫や松阪牛の市が立つ　津市　中山　道春

正木ゆう子 選

質問は渡り廊下で花八ッ手　所沢市　岡部　泉

【評】校舎と校舎を結ぶ渡り廊下で先生に質問をした記憶が、そういえば私にも。教室だとみんなが居る。職員室に行くのは気が引ける。渡り廊下はその中間。風通しの良い場所。

ゆく秋や裾野ひろがる目玉焼　稲城市　新井　温子

【評】どこの山の裾野かと思えば、実は目玉焼。大景から突然フライパンに転じるスケール感が楽しい。目玉焼の広がり具合は、朝毎の景。

今朝の冬やはり海へと向かひけり　雲南市　熱田　俊月

【評】冬めいて、海からの風が冷たいけれど、今朝も海の方へと足が向く。海辺の人は海に、山が見えれば山に、人は自然に挨拶がしたいのだ。

熊避けに大枝引き摺り音をたて　松戸市　稲葉　豊美

狐火や一本道のはずなのに　京田辺市　加藤　草児

榎の実落つるにまかす畑辺かな　町田市　枝沢　聖文

包丁をうすくうすくと蕪漬　唐津市　室井加代子

達磨市友となれそなピンク買う　東京都　田中　隆

釘銜へ槌での指図空つ風　川越市　大野宥之介

秋田発男鹿行鉄路しぐれけり　秋田市　進藤　利文

小澤　實 選

鉄板に押し付け鴨の肉こがす　神戸市　吉野　勝子

【評】鴨の肉を鉄板で焼いて、調理している。中七が「押し付け鴨の」、下五が「肉こがす」。句またがりになっている。鉄板に鴨肉を押し付けている、実感が伝わるのだ。

鯛焼の湯気抜の孔紙袋　土浦市　今泉　準一

【評】鯛焼を買ったら、入れてくれた紙袋に、湯気抜の穴が開けてあったというのだ。鯛焼のもっている熱量を、感じさせる仕掛けである。

秋晴のキッチンカーのオムライス　武蔵野市　相坂　康

【評】野外のキッチンカーからオムライスを買って、その場で食べている。よく晴れた青空に、オムライスの黄色がよく映えるのだ。

椋鳥の糞掃く日課寺の子は　羽曳野市　鎌田　武

焼藷を初めましたと電器店　吹田市　前田　尚夫

拾ひ来し馬刀葉椎の実立てて置く　神奈川県　大久保　武

どぶろくや上司まさかの泣き上戸　島根県　重親　峡人

果樹園に残る轍や暮の秋　稲城市　山口　佳紀

どぶろくを持たれよ黄泉は淋しかろ　茅ヶ崎市　清水　呑舟

どんぐりのほか見ずどんぐりを拾ふ　大阪市　今井　文雄